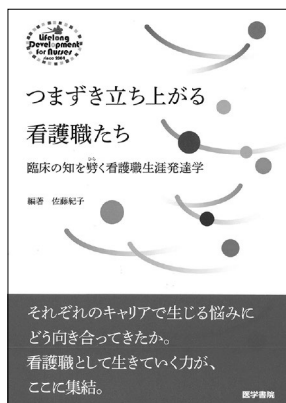


# Book Review

## つまずき立ち上がる看護職たち

臨床の知を<sup>ひら</sup>き  
看護職生涯発達学

編著：佐藤紀子



A5判・372ページ

定価：本体2,700円+税

発行：医学書院 (03-3817-5650)

## すべての大学院生と教員に薦める 看護系大学院のゼミの神髄と価値

評者

遠藤俊子

関西国際大学保健医療学部看護学科 教授

編著者である佐藤紀子氏とは、初めての出会いからかれこれ50年になるうとする年月が経っていることに感動を覚えながら読んだ。1970年代の安保闘争や沖縄返還の時代に、私達は看護基礎教育を受け、看護師人生が始まった。そして、定年までの14年間に佐藤氏は「看護生涯発達学」領域を創設し、多くの看護職と出会い、まさに<sup>ひら</sup>きに至った看護のフィロソフィーをここに表現したといえる。本書は、彼女の生きられた体験の蓄積であり、経験化された証であろう。43人の大学院生を輩出した佐藤ゼミが醸成した「臨床の知」をこのように具体的に書くことで、看護実践や教育の神髄を読み手に波及できていることを心から尊敬する。

看護師が大学院で学ぼうとする動機はそれぞれであるが、その多くが現実の看護に悩み、もがき、もっと良い看護を実践したいと思ったとき、研究という手法で何とか切り拓きたいと進学してくる。ところが、いざ研究課題の絞り込みになると、自分が何をしたかったのか怪しくなる。研究を仕上げるには、この問いを避けては通れない。先行研究、自問自答、仲間や指導教員の助言……多くのプロセスを経て、自分の扉を開いていく。このプロセスこそが大学院修士課程の入り口では重要であり、ゼミで教員や院生との対話を重ね、深め、納得していく、自分の研究課題への取り組みこそが肝になるであろう。佐藤ゼミで修士論文、博士論文を仕上げた多くの修了生が、苦しかったけれど、大きな収穫を得たことを本書で具体的に記載している。

本書の構成は、佐藤ゼミで論文を書き上げた修了生による学位論文のテーマ・内容から構成されており、指導教授である佐藤氏が編著者として、キーコンセプトを熟考している。第2章に【看護職の働き続ける力】として、キャリア初期である新人期から定年後までの看護職の課題に取り組んだ研究をつなぎ、第3章で【看護職の成長を支える】教育担当者・管理者・教員の研究課題を紹介している。第4章では【臨床の知をひらき】として、看護実践における「科学の知」と「臨床の知」の連関を語っている。終章では【それぞれが生きた「ものがたり」】として、博士前期課程（修士）34名と博士後期課程9名の論文のなかに、看護職が仕事を継続していくことの意義と価値を問うことが描かれている。彼・彼女らとの出会いが、佐藤氏の看護師人生に大きな力となったことは言うまでもない。看護生涯発達学がどのような学問であるのか、その構築を彼らとともに成しえた軌跡が見えた。

臨床と教育に携わる看護職がこのように共通認識をもち、言語化することのできる場として看護系大学院の価値をあらためて認識した。